

言語の対照研究と言語教育

著者	佐々木 倫子
雑誌名	日本語科学
巻	3
ページ	127-134
発行年	1998-04
URL	http://doi.org/10.15084/00001992

言語の対照研究と言語教育

佐々木 倫子
(国立国語研究所)

1. 言語研究における「比較」と「対照」

言語を対照するという事は、二つの言語が接触する場面では当然起こることであるから、人類が自分の生まれ育った地域を初めて出た時点で始まったとすることができる。しかし、現代の学問としての対照研究を考えるには、18世紀末に始まり19世紀に多くの業績を生みだした比較言語学との対比で始めるのが妥当と思われる。19世紀に確立された歴史言語学における比較研究の方法が、言語学に科学としての地位を与えたと言えるからである。

近代言語学の父とも形容される、スイスの言語学者フェルディナン・ド・ソシュール (1857-1913) は、言語研究をいくつかの対立軸で示したが、そのひとつが「通時態」と「共時態」である。時間軸にそって言語の変化を追うことに研究の目的を置くのが通時の研究であり、あるひとつの時期における言語の状態を捉えることを方針とするのが共時の研究である。以来、多くの言語研究に携わる人々が、複数の言語を比較対照する研究を、通時的観点にたつ比較言語学 (comparative linguistics) と共時的観点にたつ対照言語学 (contrastive linguistics) とに分けて捉えてきた。両者の違いをごく単純にまとめれば次のようになる。

	比較言語学	対照言語学
対象とする言語の関係	親族関係にある(祖語を同じくする)とされる言語を選ぶ	親族関係は考慮せず、同時期の言語を自由に選ぶ
具体例	サンスクリット語とギリシャ語など	現代日本語と現代英語など
研究方法	音韻の対応関係にもとづき、言語の歴史的変化を説明する	音声・語彙・文法などの共時的体系の類似点や相違点を分析する
研究の動機	言語の通時的変化、祖語の再構築、言語の系統分類	言語教育、言語理論構築の実証例など

このように、言語学においては「比較」と「対照」を区別して用いるのが一般的であるが、共通の祖語を持たない二つの言語、例えば日本語と英語を比べる場合にも、「比較」という語が用いられる例が少なくない。以下は、日英語の比較対照を扱った出版物のうちの代表的なものである。

(1) 「対照」を使用するもの

国広 哲弥 (1967) 『構造的意味論—日英両語対照研究』三省堂

- ジャクソン, K. L. (田中春美訳注) (1970) 『日英語の対照研究—英語中間副詞と日本語相当詞—』大修館書店 (原著: Jackson, K. (1967) *English Middle Adverbs and the Japanese Student: A Contrastive Study of Middle Adverb Word Order Patterns in English and Their Lexically Similar Counterparts in Japanese*. The Taishukan Publishing Co., Ltd.)
- 井上 和子 (1978) 『日英対照 日本語の文法規則』大修館書店
- 安藤 貞夫 (1986) 『英語の論理・日本語の論理—対照言語学的研究—』大修館書店
- 柴谷 方良ほか (編) (1992) 『日英語対照研究シリーズ1 (～5)』くろしお出版
- 窪菌 晴夫ほか (1996) 『日英語対照による英語学概論』くろしお出版

その他, 日英語の対照というわけではないが, 以下の題名もある。

- ディ ピエトロ, R. (小池生夫訳注) (1974) 『言語の対照研究』大修館書店
(原著: Di Pietro, R. J. (1971) *Language Structures in Contrast*, Newbury House)
- 寺村 秀夫ほか (編) (1982) 『講座日本語学10 (～12) 外国語との対照 I (～Ⅲ)』明治書院
- 高田 誠・石綿 敏雄 (1990) 『対照言語学』桜楓社

(2) 「比較」を使用するもの

- クライニアンズ, E. (伊藤正訳注) (1959) 『日英両語の比較と英語教育』大修館書店
(原著: Kleinjans, E. (1958) *A Descriptive-Comparative Study Predicting Interference for Japanese in Learning English Noun-head Modification*.)
- 榎垣 実 (1961) 『バラとさくら—日英比較語学入門—』大修館書店
- 小泉 保ほか (1963) 『日英両語の比較研究・実践記録 英語教育シリーズ別冊』大修館書店
- 太田 朗ほか (1965) 『現代英語教育講座第7巻 日英語の比較』研究社
- 大江 三郎 (1975) 『日英語の比較研究—主観性をめぐって—』南雲堂
- 榎垣 実 (1975) 『日英比較表現論』大修館書店
- 國廣 哲彌ほか (1978) 『現代の英語教育8 日英語の比較』研究社
- 影山 太郎 (1980) 『日英比較語彙の構造』松柏社
- 國廣 哲彌 (編) (1980～1982) 『日英語比較講座 (全5巻)』大修館書店
- 水谷 信子 (1985) 『日英比較 話しことばの文法』くろしお出版
- 中右 実 (編) (1997～) 『日英語比較選書1～』研究社

日英語以外の対照としては以下のものもある。

- 筑波大学現代言語学研究会編 (1997) 『ヴォイスに関する比較言語学的研究』三修社

数だけを見ると「比較」の方が幾分多い。また, 言語学以外の分野では, 共時的研究であって

も「比較文学」「比較文化」のように言うということもある。言語学においても、通時的な観点の有無に関係なく「比較」という語を使った方がよいという立場もあろう。しかし、現時点では、「対照言語学」と「比較言語学」の区別は一般的に受け入れられており、それが「対照」と「比較」の使い分けに影響していることは確かである。本稿では「対照」を使いたい。

2. 第二言語教育と対照研究

2.1. 構造言語学における対照分析

現在の対照研究の流れを考える時、1940年代のアメリカ構造言語学の成果を背景にして生まれた「対照分析」から始めるのが一般的であろう。Charles C. Fries (1945), Robert Lado (1957)らによって確立された対照分析は、効率的な外国語の教授を目的として始まった。学習者の母語と目標言語とを同じ分析法によって記述し、体系的に対照させることによって、学習者の困難点を事前に予想できると考え、母語の干渉による誤用を事前に防ぐような外国語教育を行うとする考え方である。フリーズは、音声・文法構造、語彙・文脈（社会環境・文化など）の対照を主張し、続くラドーも新たに文字体系の対照も含めて、言語および文化の組織的対照の必要性を主張した。母語・母文化と目標言語・文化との間に差異がなければ、第一言語習慣は適切に転用され第二言語習慣の学習を容易にするし、差異があれば困難や誤りを引き起こすとする。この考え方は1950年代から60年代にかけて広く受け入れられた。

無論上記では主張が単純化されており、例えば日本人に対する英語教育について述べている太田(1965)でも、「実際教授の際には、2 国語の音体系の比較だけからは予測できないいろいろの外部的要因が混入して来る。たとえば、文字の影響、日本語になった英語の発音の影響、個々の教師が与えるモデル、教え方など」(pp.3-4)と述べられている。そして、単なる母音、子音などの分節音素だけでなく、リズムやアクセント、イントネーションの対比もされており、音素の対比だけでなく、各音素の異音の種類と分布、また、直接意味の弁別には関係しない音声的特徴の記述もされている。しかし、詳細な対照がなされれば、日本人の英語の発音教育が効果的なものになるかと言うと、そう直接的には結びつかない面もある。しかも、日英語の対照分析では、アメリカ構造言語学の特徴を反映して、語彙レベル、文法レベルの分析では、音声レベルほどの網羅的かつ詳細な対照はなされていない。対照分析の提唱者であるラドー自身、対照分析が学習者の誤りをすべて予測できるとは言っていないし、また、言語構造のみではなく文化的対照も必要だとも主張している。しかし、現実には言語構造の対照に過度の期待がかけられる結果となり、1960年代後半のころから、過剰な期待に対する反省が強くなった。

2.2. 誤用分析・中間言語研究・第二言語習得理論

対照分析にかわって登場したのが「誤用分析」(エラー・アナリシス)である。コーダーらは誤用例を分析し、誤用の原因に母語の干渉による以外のものが存在することを示した。既に学習した目標言語の運用のルールを過剰に適用してしまう過剰一般化や、辞書・教材や教授法の偏りから生じる誘導などの誤用の要因が明らかにされた。

安井(1981)には、日本人が英語を学習する際「information に不定冠詞を付けたり、hazard の代わりに danger を用いたり、rescue の代わりに help を用いたりするのは、きちんと教えを受けていないからではないか」という言及があり、『未熟な習得』や『未熟な教授』を『母国語の干渉』という一見科学的な用語で覆い隠すことがあってはならない」(p.29)とも述べられている。確かに、教師による明快な導入によって最初から誤用が回避されることも多いが、同時に、冠詞の誤用などは広く見られ、また、学習者が上級レベルになっても見られる現象である。つまり、学習者が目標言語を習得していく途中の段階で形成する言語に、かなり安定した体系性が見いだされる。しかも、その体系が母語からの転移とは別個の、異なる母語を持つ人々の間に共通することも多い。また、誤用ではなく、ある構造が回避される非用といった現象も見られるし、言い換えや身ぶりによる代用もある。Selinker (1972) は、このかなり安定した学習者の体系を「中間言語」(interlanguage) と名付けた。誤用という負の評価をする見方とは異なり、正用も含めた学習者言語の総体を見ていく立場は、現在では広く受け入れられている。

さらに、第二言語習得の成否は、その言語を習得する目的やニーズ、学習者をとりまく環境や学習支援システムが重要な因子となる。また、学習者の年齢は無論のこと、用いられる教授法や学習スタイル、教育観、学習者の適性なども大きく影響する。水野(1995)は、学習者の態度、動機づけ、感情移入などの情意因子が第二言語習得の成否を解明する手がかりとなると言う Schumann の説を紹介しているが、現代は学習者の心的過程の関与までも含めた言語習得を考える時代である。

それでは中間言語や情意分析などの出現によって、対照研究が第二言語教育に果たす役割はなくなったのであろうか。答は否である。中間言語の具体的な姿を確実に捉えるためにも、様々な母語の学習者の中間言語と学習者の母語、および目標言語の対照分析は必要であるし、言語教育には学習者の言語習得上の心理的要因までも含めた対照研究が必要である。また、コミュニケーション能力の育成を目的とする言語教育に結びつくことを意識した対照研究では、言語体系だけではなく言語運用の対照も重視されるべきである。例えば、Blum-Kulkaほか(1989)による CCSARP (Cross-Cultural Speech Act Realization Project 異文化間言語行為具現化プロジェクト)では、7カ国6言語の「依頼」と「謝罪」の発話行為の方略を調査している。それを基にした日本人被験者を対象とする対照研究なども、橋元(1992)や平賀(1996)に報告され、興味深い結果が示されている。同じ言語行為を持つのも、文化・社会の影響でどのような特徴が現れるかを解明するもので、これまで「依頼、謝罪、感謝、誘い、断り」などの言語行為の解明はかなりの成果を生んだ。待遇表現、対人関係調整機能など、対照語用論分野の成果が期待される研究項目は多い。対照研究がその範囲を広げることはあっても、存在意義を失うことはないのである。

3. 対照研究のあり方や意義を規定するもの

二つの言語を対照するという状況を考えて場合、その発端には様々な形が考えられる。例えば、日本語母語話者が英語の研究を最初に行い、次に自身の母語である日本語も加えて二つの言語を対照することもあろう。あるいは南米の高地に点在する民族語のひとつの記述を志す日本人言語

学者が、ある程度その言語の記述が進んだ段階で、近隣のつながりのない民族語と対照させる（その際母語である日本語は入り込ませない）といったことも考えられる。また、日本語の研究者が日本語の特徴を相対的な視点からとらえようとして他言語と対照するということもあるだろう。

このように多種多様な形があって当然の分野ではあるが、その一方では、言語研究の動向が対照研究の動向や意義を左右するということもある。例えば、柴谷方良ほか(1992)には言語理論研究と対照研究との関係が次のように述べられている。

…英語圏において開発された言語理論は自然と英語を中心に発達するが、その普遍的妥当性の検証において、異なった類型特徴を持つ日本語は格好の資料を提供してきた。また、同時に日本人研究者にとっては、高度なレベルの言語知識、言語直感を要求する現在の言語理論の研究においては、日本語こそが最強の武器となるのである。したがって、日本人研究者による言語理論の研究は、その実践において必然的に日・英語の対照研究に従事することになる。…(p.v)

このような姿勢にもとづく理論指向の対照研究と、「多数の言語のデータを偏りなく集める」「抽象化を最小限に押さえる」「言語の普遍性の根拠を、人間の生得的特性だけに求めず、機能的な要因なども考慮する」(コムリー1992: 第1章) ことを基本方針とする言語類型論的な視点に立った対照研究、あるいは言語運用を研究の中心に据えた対照語用論的研究とでは、対照研究のあり方や意義が大きく異なってくる。

個別言語研究の傾向も対照研究のあり方に大きく影響する。この点については、第二言語としての日本語教育が盛んになったことも見逃せない。日本語教育の現場では、多様な背景を持つ学習者が様々な質問を教師にぶつける。それまでの文法知識では答えることが出来なかった時、日本人・外国人を問わず、現場の教師は現代日本語の解明に取り組みざるを得ない。これが、言語学者を巻き込み、現代日本語研究、さらには日本語と外国語の対照研究の推進につながったことは否定できない。

以上述べたことはアカデミックな世界における動きであったが、ここではもうひとつ、実社会の動きが直接対照研究に働きかける時代が日本にもやってきていることに触れたい。1980年代以降、日本社会は大きく動き始めた。現代は地球規模で交通・通信が行われている時代である。ごく普通に生活している人々が、日常生活の中で、様々な言語およびその使い手と直接的な接触を持つ機会も多い。外国語と日本社会・一般日本人の関わり方が、対照研究の方向に強く影響を与える時代が来ているのではないか。

現時点において、日本に生まれ育ち、日本の大学の学生となっている若者たちの外国語との接触体験はどのようなものだろうか。日本といっても、地域、大学によって大きな差があることは確かであるが、身近にいる女子大学生50人を調査したところ、2年生、3年生中心であるにもかかわらず、海外に行ったことのない学生はわずか12人であった。

さらに、日本国内での外国人との接触も多くなっている。例えば、以下のような接触である。

…神奈川県に住んでいるため、中学時代、ミャンマー、ラオスの人などが1クラスに一人ずつはいた。彼らは日常会話は不自由ないが、国語の教科書を読んだりには苦手であった。彼らの母親はたいてい日本語が出来ないため、先生が家庭訪問をする時には、通訳をつとめる。しかし、自身の母語も日本語もそんなにうまくはない。社会科の先生がラオス語をみんなに教えてほしいと言った時には、ラオス語を教えるほどには出来ないと言ったが、母語が出来ないというのはどういうことかと思った。

今後も、日本語を母語としない人々との直接的な接触体験を持つ日本人は増え続けるであろう。当然、中国語、ポルトガル語といった彼らの母語に対する関心は出てくるし、彼らとのより良いコミュニケーション能力を自分たちの中に育てたいという気持ちも出てくる。その時、日本の外国語教育も対照研究の性格も変わっていくと思われる。言語の構造的側面だけでなく、口頭の言語運用場面に現れる非言語行動の分析、機能、対人関係などの語用論的側面、さらにコミュニケーションの背後にある生活習慣、価値観などの文化的側面の対照をも含んだ研究がますます必要になろうし、また実際にそのような研究が盛んになりつつある。そして、日英対照研究に極端に集中する傾向のある現状にも変化が見られるであろう。

4. 対照研究の今後の展開にあたって

日本語と外国語との対照研究の今後を考える時、そこには以下の方向性が見えるのではないだろうか。

(1) 言語資料の質と量の充実

過去の多くの対照研究は、人的、時間的をはじめとする種々の制約の中でデータが収集・分析されてきた。従って、量的な限界は無論のこと、質的にも多くの限界が見られる。例えば、話しことばの対照であっても、小説の中のせりふをひとつの言語の話しことばの資料とし、その翻訳を一方の言語の資料として両者を対照するといった形も見られる。また、ひとつの言語では脚本なしの自然会話の文字化資料を用い、もうひとつの言語では脚本そのままを用いるといった例もある。研究項目によってはとりあえずはそれで十分なこともあるし、ここから得られる知見も少なくはないが、しかし、地球規模の通信・交通手段が発達した現在では、資料収集も以前よりは容易になっており、言語のテキスト・タイプをそろえることがより厳しく要求されよう。また、ケース・スタディは別として、一般化を試みる場合には、量への要求もより厳しくなされるだろう。今後は資料の充実が質・量ともにいっそう重視されると予測できる。

(2) コミュニケーションにおける動的プロセスの重視

複数の言語の静的な言語体系を捉えて対照するだけではもはや十分ではない。コミュニケーションは動的なプロセスであり、それを捉える試みは対照研究においても今後より重視されるべきである。第2言語習得もまた動的なプロセスであることを考えると、これからの対照研究においては言語の動的な側面がますます重視されるだろう。

(3) 二言語から多言語への広がり

改めて触れるまでもないが、すべての言語は人間の言語という点において同じ価値を持っている。日本語は日本人の多くにとって母語という特別な価値を持った言語だとしても、研究の姿勢において、対照する他の言語からことさら特別視しない客観性は堅持したい。また、対照される言語の選択と、経済的、政治的影響の強さなどは直結しないことを基本原則とした上で、限られた人的・経済的条件の中で対象言語を選択する際には、社会の要請、社会のニーズが考慮されるべきである点も認識したい。ニーズが対照研究を生みだし、対照研究が社会に何らかの貢献をする形が望ましい。

また、ある言語研究の枠組みを実証するデータを考える時、二言語間のデータだけで検証されたと確信出来る項目は限られる。世界の様々な言語において人がどのように事象を認知し、どのように言語を産出し、理解するかを見ることによって、より確かな枠組みの検証が出来よう。さらに、現代は国内における日本語学習者の母語が多様で、また、世界の思いもかけないような地域において日本語学習が実践されている時代である。その意味でも日本語と多数の言語との対照研究が目標とされるべきである。

(4) 応用的・社会言語学的広がり

日本は本格的な共生の時代を迎えつつある。海外に出る日本人も多い。国内・国外を問わず、日本人と外国人との直接的な言語接触の機会が多いわけで、対人コミュニケーションの展開を視野に入れた対照研究の緊急性は高い。地球規模の通信網の発達、人の交流は、意外な日本語使用区域を作り出し、想像外の言語接触を生みだしているかもしれない。言語使用の実態、言語環境全体を視野に入れる対照研究が必要な由縁である。対照研究には非言語行動は無論のこと、背景となる社会文化情報といったコミュニケーションに関連する様々な因子も当然考慮すべきである。また、第二言語では、運用においても習得においても心理的側面を無視することは出来ない。目標言語が用いられる社会に対する心理的距離などの情意因子の対照もまた重要な鍵となる。対照研究の最初の目的が第二言語教育にあったことを思う時、これまでの対照研究が言語教育にどれだけの貢献をしてきたかを、ここで改めて反省したい。特に、地球規模のコミュニケーションが日常的に行われている現在こそ、対照研究が貢献できる点は多いと思われる。第二言語教育の分野だけでなく、母語教育を含めた総合的な言語教育においても、社会の様々な言語との関わり方を考える上においても、今後の貢献にいつそう期待したい。

引用文献

- 太田 朗ほか (1965) 『現代英語教育講座第7巻：日英語の比較』 研究社
コムリー、バーナード (著) 松本克己・山本秀樹 (訳) (1992) 『言語普遍性と言語類型論—統語論と形態論—』 ひつじ書房 (Comrie, Bernard (1981,1989) *Language Universals and Linguistic Typology*. Basil Blackwell Ltd.)
柴谷方良・西光義弘・影山太郎 (1992) 「シリーズまえがき」 三原健一 (著) 『日英語対照研究シリーズ1 時制解釈と統語現象』 くろしお出版
橋元 良明 (1992) 「間接的発話行為方略に関する異言語間比較」 『日本語学』 Vol. 11, pp. 92-101, 明治書院

- 平賀 正子 (1996) 「ことばと行為」『表現と理解のことば学』 pp.7-25, ミネルヴァ書房
- 水野 光晴 (1995) 『外国語習得 その学び方100の質問』 研究社
- 安井 稔 (1981) 「対照研究の流れ」『言語』 Vol. 10 No.12, pp.22-29, 大修館書店
- Blum-Kulka, S., J. House & G. Kasper (eds.) (1989) *Cross-Cultural Pragmatics: Requests and Apologies*, Ablex Publishing Corporation.
- Fries, C. C. (1945) *Teaching and Learning English as a Foreign Language*. (太田朗訳注1957 『外国語としての英語の教授と学習』 研究社)
- Lado, Robert (1957) *Linguistics Across Cultures* (上田明子訳注 (1959) 『文化と言語』 大修館書店)
- Selinker, L. (1972) "Interlanguage", *International Review of Applied Linguistics X*. pp.209-230

付 記

本稿は、平成9年度国立国語研究所公開研究発表会（1997年12月19日）で行った「対照研究の流れと国立国語研究所における対照研究の系譜」と題する口頭発表の一部をまとめなおしたものである。

佐々木 倫子 (ささき みちこ)

国立国語研究所日本語教育センター 115-8620 東京都北区西が丘3-9-14
msasaki@kokken. go. jp